

# データ収集と分析、構造モデル構築の質的な研究方法についての検討

横浜国立大学大学院 環境情報学府

博士課程後期 堀 恭子

A Study about qualitative method of data collection, analysis and structural modeling

Kyoko HORI

Graduate School of Environment and Information Sciences, Yokohama National University

## 要旨

高齢化が急速に進むわが国において認知症高齢者の介護は大きな問題となりつつある。

本研究の目的は、認知症高齢者を介護する職員が体験していることを認知症高齢者と介護職員の相互作用の視点を持って明らかにし、介護の質向上と職員のメンタルヘルス向上に寄与しようとするものであり、本稿は、質的研究法を用いて、介護職員の体験をインタビューによって引き出し、参与観察結果を加えて分析、関連する概念を構造モデル化する探索的研究プロセスに検討を加えた報告である。

結果として、データ収集方法としてのインタビューは有用であり、データをより厚みのあるものにするには、参与観察が重要であった。またインタビューガイドとして、インタビューイの記述はメモ程度のものであってもデータから研究者の恣意を排除すると考えられ、インタビューにおいてラダリングを用いることが職員の介護体験構造を導き出す手助けになることが示唆された。分析については、分析ワークシートを用いることで分析の過程を可視化することができ、カテゴリー・サブカテゴリー・概念の構造を俯瞰でき、構造モデル図構築が容易となった。しかし、調査対象によってデータ収集方法の再検討が必要になると予測されたこと、など検討課題も残された。

## SUMMARY

Providing care for the demented elderly is a serious problem in Japan, where the population is aging rapidly. The purpose of this research is that experiences of care workers for elderly people with dementia are investigated from the perspective of care worker's interactions with users, in order to improve the quality of care and the mental health of the staff. In this research, interviews are inquiring about work experiences were conducted with care workers, qualitative analysis is conducted on data from participant observation. Then a structural model was developed. This report examines these exploratory data collection, analysis and structural modeling.

Results indicated that interviews were useful as data collection and participant observation was important in order to enrich the data. Addition to that description of interviewee eliminate arbitrariness of researcher and using "Laddering method" helped developing structural model of the experiences of care staff. Usage of worksheet made visualize process of analysis and also made it easy to construct model due to grasp the structural relation among category, sub-category and concept.

However it was predicted that it is necessary to restudy method of data collection.

## 【問題】

高齢化が急速に進むわが国において認知症高齢者の介護（以下認知症介護）は大きな課題のひとつである<sup>1) 2)</sup>。筆者も、介護心理相談員の経験から認知症介護問題の難しさは実感しており、寄せられる相談に介護者の感情に関わる訴えが多いことから、認知症介護の理解には疾患によって起こる身体的障害と共に、認知症高齢者と介護者の間に起こる相互作用の視点を踏まえた理解が重要ではないかと考えるようになった。これが筆者の研究の原点である。

研究に先立ち、認知症や認知症介護について探索的に文献検討を行った。その結果、認知症介護においては「認知症の人を、言動の背景も含めて統合的に理解し、その理解を支援につないでいくことが求められるゆえの困難性」が存在することが明らかになり、その困難性から生じる「介護の質の問題」と「介護者の感情面への影響」が予測された。また、日本の高齢者介護の現状を考えると2000年の介護保険制度導入に

より介護の社会化、すなわち高齢者介護は身内が行うものから、介護を受ける高齢者がサービスとして選ぶものへという変化が生じた<sup>3)</sup>。しかし介護の専門職制度はまだ歴史が浅くさまざまな問題が生じている<sup>4)</sup>。

そこで認知症を介護する職員の心理・行動プロセスに焦点をしぼり、さらに検討を行い、認知症介護には、症状から対応する医学的知見と個別ケアを重視しがちな福祉的知見の中間に立つ立場として、心理学的側面からの研究成果を取り入れていくことがこれからの認知症介護にとっての重要な課題のひとつであり、心理学的成果の中には相互作用の視点も含めていくべきではないかという考えに至った。

そこで、本研究において、研究目的を「認知症高齢者と介護サービスを提供している介護職員の相互作用に対する理解を深める」ことにおき、「認知症介護に携わる職員は介護をどのように体験しているか」というリサーチクエスチョンのもと、介護職員が働く場で体験していること、一人ひとりの介護職員の意識に上

る、人との関わりや出来事がどのようなもので、意識に上ることは互いにどのように影響しあっているかを明らかにしていくことにした。

研究目的およびリサーチクエスションに照らして、どのような研究方法が適切なのか吟味した。相互作用はそれぞれが特徴を持った個人と個人、または個人と場の関係の中に、つまり文脈の中に立ち現れることを考えると、個体差の軽減や文脈の影響を排除する方向へランダムサンプリングを行う推測統計学を用い、一般的な法則の発見や仮説の検証を目的とする量的研究法を単一的に採用するのは適当ではないと判断した。また、本研究の課題である「介護職員が体験していることの構造を心理学的な視点から明らかにする」研究において、学問的検討の蓄積が少なく量的な検討が存分になされていない現状も考慮して、質的研究法を用いることとした。

質的研究法を用いるにあたり、研究に広義の科学性を保障するための具体的方法をさらに吟味した。西條は質的研究の科学性について、「知見が信用に値すること、すなわち研究が信憑性のある構造であること」と述べ「研究が信用に値するということは、知見が恣意的に導き出されたものではないと指し示すことができることであり、このことは、質的研究における研究者の主観や解釈を活かすという側面と、矛盾するものではない」と説明している<sup>5)</sup>。筆者もまた同様の考えを持っており、本研究に広義の科学性をもたせる手段として、知見がどのように導かれたかを明示すること（以下プロセスの可視化）、プロセスの可視化の結果として読者に反証可能性を与えることの2点が必要と考えた。西條は、論文の科学性は、条件統制ではなく条件開示を徹底することにより担保されると述べているが、西條の言う条件開示とは「論文構造化に至る軌跡」を残す、すなわち研究プロセスの可視化であると考えられるからである。

本研究では、「認知症高齢者と介護サービスを提供している介護職員の相互作用に対する理解を深める」目的を持ち、「認知症介護に携わる職員は介護をどのように体験しているか」というリサーチクエスションのもと、研究に広義の科学性を担保するために「プロセスの可視化とその結果としての論文読者に対する反証可能性」を持った研究方法を用いることとした。

本稿では、これまでに述べられた、「プロセスの可視化とその結果として論文読者に対して反証可能性を保証する」探索的研究プロセスに関して検討を加えることを目的とする。方法として、質的研究における探索的プロセスを詳細に記述し、さらに結果に検討を加える際、能智が質的研究の質と評価基準について述べ

ている論文<sup>6)</sup>、特に「質的研究の質を高めるための視点」の項を参照して進める。能智は量的研究での信頼性・妥当性といった評価基準を、そのまま質的研究に適用するのはいささか無理があると述べながら、一方で量的研究・質的研究いずれも「研究」という名の広義の「科学」のもとで行われている営為であることを考えると、素朴な観察だけでは見えてこないことを、データをもとにしてより確かな言葉にしていこうとする点で共通していると述べている。そうした共通性を考慮して質的研究を評価するのに利用可能な視点を整理しており、これらの視点を参照しながら研究プロセスに検討を加え、採用した研究方法が目的としている「プロセスの可視化とその結果として論文読者に対する反証可能性を保証」しているか否か検討していくこととする。

## 【方法】

### I データ収集

#### I-1 調査対象

我が国では、介護サービスを受ける人のおよそ7割が在宅で、在宅高齢者の多くはデイサービスを利用しているという厚生労働省の報告<sup>1)</sup>に基づき、本研究では、通所型介護サービス（以下デイサービス）、中でも認知症デイサービスを行っている事業所を対象とした。対象は規模が小さく職員全員に面接調査ができ、対象事業所全体の構造と人間関係の相互作用が分析可能なところを選択した。

職員は6名で全員が女性、1日の最大受け入れ利用者12名である。職員の勤務は月曜日から土曜日のうち交代で1日4名体制。職員の内訳は管理者1名、リーダー1名（以上社員）、4名の介護職員（非常勤）であり、職員の属性は以下の通りで、各職員に便宜的にアルファベットを振った。

表1 職員属性

職員	年齢	職務内容	介護経験年数
A	49	管理者・常勤	16年9ヶ月
B	44	リーダー・非常勤職員	4年9ヶ月
C	50歳代	非常勤	5年10ヶ月
D	40歳代	非常勤	4年10ヶ月
E	20	非常勤	10ヶ月
F	46	非常勤	4年1ヶ月

#### I-2 データ収集方法

一般に質的研究における洗練の方向性は、量的研究において母集団から多数のサンプルをランダム抽出し実証化していく方法と大きく異なっている。質的研究においては、研究対象となる現象や特徴、行動などを

典型的に体现するごく少数の対象を抽出し、そうした少数の対象サンプルについて、サンプルそのものだけでなく、それぞれのサンプルを取り巻くさまざまな環境／状況要因や、そのサンプルの歴史なども含めた多重な文脈の濃厚な記述を行うことで研究の妥当性を保証していく<sup>7)</sup>。多重な文脈の濃厚な記述（以下分厚い記述）をデータとして収集するための方法が吟味された。

筆者は、認知症高齢者が帰宅願望を表出した際、認知症高齢者と介護職員に起こる一連の事象を捉える自由記述の質問紙を用いた調査を経験している。しかし、この方法では介護職員の体験が本人の興味や関心において描かれてしまい、研究課題にそった質問によってデータの厚みを増すことができない限界が明らかになった<sup>8)</sup>。これらの限界を遠ざけるため調査方法としてインタビュー法を用いることとした。本研究の目的が介護職員の体験をそのまま収集するというところに置かれているため、質問項目をあらかじめ設定する構造化、半構造化インタビューは妥当ではないと判断された。非構造化インタビューを用いることにし、やまだのマイクロアナリシス<sup>9)</sup>を参考にすることにした。やまだは、インタビュー法について、対話的に話を聴く人間科学の基礎的方法と位置づけた上で、インタビューはニュートラルな存在ではありえず、アクティブな相互行為を行う参与者であり、インタビューイの語りは固定的に存在していた既存のもの（object）ではなく、インタビュー状況の中で共同生成的に生み出された生きもの（lives）であると説明している。従ってインタビュー行為はそれ自体が貴重なナラティブ研究の対象であると同時に、常に省察的に研究されるべき対象でもあると注意を促している。そこで、インタビューイがインタビューアから語りを規制されることなく、自由にインタビューイ自身の内面から引き出された項目（以下自由連想項目）について語るができる方法として、内藤のPAC分析<sup>10)</sup>の面接法を用いることにした。PAC分析は、個人別態度構造（Personal Attitude Construct）の略称である。まず与えられた教示文にそって被検者自身が自分の考えや感情を調査者の影響がない状況で展開する。この事前データをもとに個人の態度構造として分析し、その結果をインタビューイに示してインタビューを行い、その語りを引き出す方法である。また、内藤は「PAC分析面接法においては、個々の自由連想項目については内容に気づいて開示を避けることができたとしても、多重解析によって析出される構造までをチェックすることは困難である」とも述べており、インタビューイの内面をより深く反映したデータとなることを期待して

採用した。

さらに、対人援助職における相互作用についての文献検討で、コーリーらが援助される人へと同様にあるいはそれ以上に援助する側の心理状況、特に感情と、その心理状況・感情の結果として援助している側の言動に注意を払う必要があると述べている<sup>11)</sup>ことから、介護する関係性の中で介護職員の内面に起こる感情の理解が重要と考えられたので、介護職員がどのようなことを印象深く感じているのかについてのインタビューデータを補足することにした。筆者が観察可能な範囲の出来事で、介護職員が印象深く感じたことについて記述してもらい（表2）、PAC分析面接法によるインタビュー項目の補足として用いることとした。筆者は前述の自身の調査<sup>8)</sup>で、印象深い出来事を記述してもらうという方法は、職員と認知症高齢者、その周りの人々や状況が作り出す場面がどのように構成され、職員がそれをどのように捉え、どのように対応するのか、を一連の流れとして捉えるために有効な手段であることを経験している。しかし問題の項で述べたように、記述だけのデータは、記述をする人の興味関心において描かれてしまう限界も明らかになったので、この点を補うためにこの記述データについての感想を聴くというスタイルのインタビュー方法を用いることにした。この方法は、インタビューイ自身が記述した内容について聴くと同時に、同じ出来事が1ヵ月後のインタビュー時にはどのように感じられるかも聴くことができ、データをより複層的に収集できると考えた。

また、筆者がインタビューイ（介護職員）の語りをより深く理解し、考察に役立てるために、実際のインタビューの前に参与観察を行い、インタビューで得られたインタビューイ（介護職員）の語りを、心理的構造分析の観点から深めることができるよう工夫することとした。

データ収集は、まず、参与観察から開始した。インタビューの約1カ月前、筆者は6日間、8：30～18：00の間、職員の指示に従い、送迎やフロア準備・片付け、屋内外活動の補助など行った。気づいたことをメモに残し、利用者別、職員別、フロア全体として記録した。参与観察開始時に介護職員に、簡単な質問紙（年齢、現事業所を含む介護経験：職種・常勤非常勤・年数、持っている資格、介護職についたきっかけ）を渡してインタビューまでに記入してもらうよう依頼した。

PAC分析によるインタビューに必要な作業は、参与観察の期間を使い行った。本研究では、介護職員の負担を考え、パソコンソフトPACアシスト20070801



(土田、2007)により、インタビューからのデータ入力とその後のデータ処理をパソコン使用により行った。職員に「仕事について思っていること・考えていること、自分の役割」などについて言葉や短文(以下、項目)を思いのままコンピューターに入力してもらう。その回答結果は、クラスター分析により項目間の類似度と重要度を表す樹状図(以下デンドログラム)として表記される。インタビューでは筆者が、デンドログラムの表す意味について説明し、職員の感想を聴くという手順でデータを収集した。

また表2の、介護職員が印象深く感じたことについての記述は参与観察が行なわれた間の出来事を記入しておいてもらい、インタビュー時に持参してもらった。

インタビューはまずデンドログラムを提示して行い、引き続き記入しておいて貰った印象深かった出来事について話を聴くという手順で行われた。インタビューにおける質問は、構造を捉えるために有用と判断しラダリング<sup>12)</sup>というインタビュー法を用いた。ラダリングの手続きは、より抽象度の高い概念を尋ねる質問「それは何と関係がありますか?」「どうして(何のために)そのように思われますか?」等と、「具体的にはどういうことでしょうか」などより具体的な下位概念を尋ねる質問からなる。これらの質問はインタビューイが語った内容に限って行われ、インタビューイから新たな項目・内容について尋ねることはなかった。このような工夫によって調査者の思い込みをなるべく排除し、かつ語られた事柄の関係性がわかるようにした。

インタビューは、参与観察の約1ヶ月後の3日間を使用し、職員の勤務時間終了後、施設の別室で行った。各インタビューは40分から2時間程度であった。

表2 「印象深かった出来事」記入用紙(例)

お名前	○山 △子		No.	
日付	ご利用者の様子・言動	あなたの感じたこと・考えたこと	あなたの取った言動	ご利用者の変化・あなたの感想
○月○日	A様昼食時まだ残っていて食事が進んでいない  (以下省略)	食事を終わりにした方がよいのか迷ったので、前回の申し送り通りやってみようと思った。	左耳から大きな声で「おなかはいっぱいですか」と聞いてみた	「もう一杯で食べられないよ」とおっしゃり会話が成立。うれしかった。

## II 分析

質的研究にはいくつかのタイプがあり、その分析法も少しずつ異なっていると考えられる。いずれにしても統計的な分析とは異なり、マニュアルの指示通りにデータを操作すれば確実に結果がでるわけではなく、誰が行っても同じ結果を得られるわけでもない<sup>13)</sup>。したがって、本研究では質的研究法の中の何かひとつの分析方法を用いるというよりは、研究目的やリサーチクエスチョン、および得られたデータそのものに照らして、分析方法を吟味し、使用していきたいと考えた。分析においても、データ収集と同様、広義の科学性を保証するためにプロセスを可視化し、本稿読者への反証可能性を担保することが必要であると考えた。

そこで分析ワークシートを用いることとした。分析ワークシートを用いる理由は、第1に多くのデータを整理し、概念抽出や概念をカテゴリーに統合していくのに適しているため、第2に分析の過程を可視化して本研究の分析手順や分析内容に対して論文読者からの反証可能性を保障するためである。

分析の手順として、録音したインタビューデータを逐語データ(以下テキスト)に起こし、全体を読み解き語りの流れをつかんだ上で、分析ワークシートを用いて、語りに含まれた感情やそこで表現されている概念を描き出した。これらの概念を表す分析ワークシートは、まず職員別に作られた。分析ワークシートがまず職員ごとに作られたのは、職員にはそれぞれ経験や職場での役割、性質などに裏打ちされた個性とも呼ぶべき考えや動きがあり、各職員の個性と利用者・環境の相互作用の結果形成される介護場面での関係を明らかにしたいと考えられたためである。使用した分析ワークシートは4列になっており、1列目は概念名、2列目は概念名の示す内容(概念の定義)、3列目は概念に組み込まれた逐語データ、4列目はカテゴリー化のためのメモであった(表3)。

表3 職員別分析ワークシート(例)

概念名	まとめる
内容(概念の定義)	認知症デイサービスをまとめる
バリエーション	・まあやっぱり、この、認知デイをどうまとめていくか、はやっぱりテーマですし(以下省略)
メモ	システムをまとめる、システムの下位概念

その後、6例の職員別分析ワークシートの概念を比較検討し、類似点、相違点を考慮しながらサブカテゴリー、カテゴリーとしてまとめ、さらに各カテゴリーの関係や各カテゴリーを構成するサブカテゴリー概念の関係を見て、全体の構造を描き出す分析作業をおこ

なった。このように「個」から、「全体」構造への統合が可能であると考えたのは、個々の体験から抽出された概念が、一介護施設という、同じ場を共有している介護職員内で体験として完結しているという研究条件と、本研究が参与観察で「場」と「介護者間の人間関係」を観察して得られたサブデータが、概念を統合していく上でのガイドの役割を持ち、その裏付けとなるとの判断からである。

本研究は「認知症高齢者と介護サービスを提供している介護職員の相互作用に対する理解を深める」ことを目的とし、相互作用の視点を持って介護職員の職場での体験構造を明らかにしていくものであることを意識して、全体のカテゴリー別分析ワークシートは、語られている内容の視点が誰から誰に向けられたものか、つまりどのような関係性の上に成り立っているかに着目して作成された。

全体を構成するカテゴリー別の分析ワークシートは3列になっており、1列目はカテゴリー、2列目はカテゴリーを生成するサブカテゴリーとそのサブカテゴリーの下位概念およびその下位概念の意味と最後にその下位概念を抽出した職員をアルファベットで表記した。3列目は構造モデル図作成のためのメモとした(表4)。

また、本研究の目的にある「認知症介護の場における相互作用」という視点を持って分析を進める途中で、キーワードと考えられた「ジレンマ」に関わる概念については、カテゴリー別分析ワークシート作成

時、下位概念の末尾に【ジレンマへ】と特記し、構造モデル図作成に活かした。

表4 カテゴリー別分析ワークシート(例)

カテゴリー名	自分(職員)→利用者
サブカテゴリー	<b>利用者を支える</b>
・概念	・利用者を不安にさせない意義—介護職員が認知症利用者を不安にさせない意義—(C)
—概念定義—(職員)	・不安にさせない方法—介護職員が認知症利用者を不安にさせない方法—(C)
	・認知症の方への入浴サービス(苦勞)—特徴と導入工夫—(B)
	・1対1対応実現の難しさ(B)【ジレンマへ】
	(以下省略)
メモ	利用者を共感を持って支える

### III 構造モデル図

カテゴリー別分析ワークシートを参考に介護職員の体験を構造モデル図に表した(図1)。各々のカテゴリーやサブカテゴリー・概念の関係性を表すために矢印を用い、矢印が指し示す方向で関係性を表すようにした。また、介護職員が自分自身や認知症高齢者(以下利用者)について述べたことについては、まとめて示した。

この図を説明する際、構造についてカテゴリー別分析ワークシートの内容と共に適宜ローデータを提示しながら、結果の記述を行った。

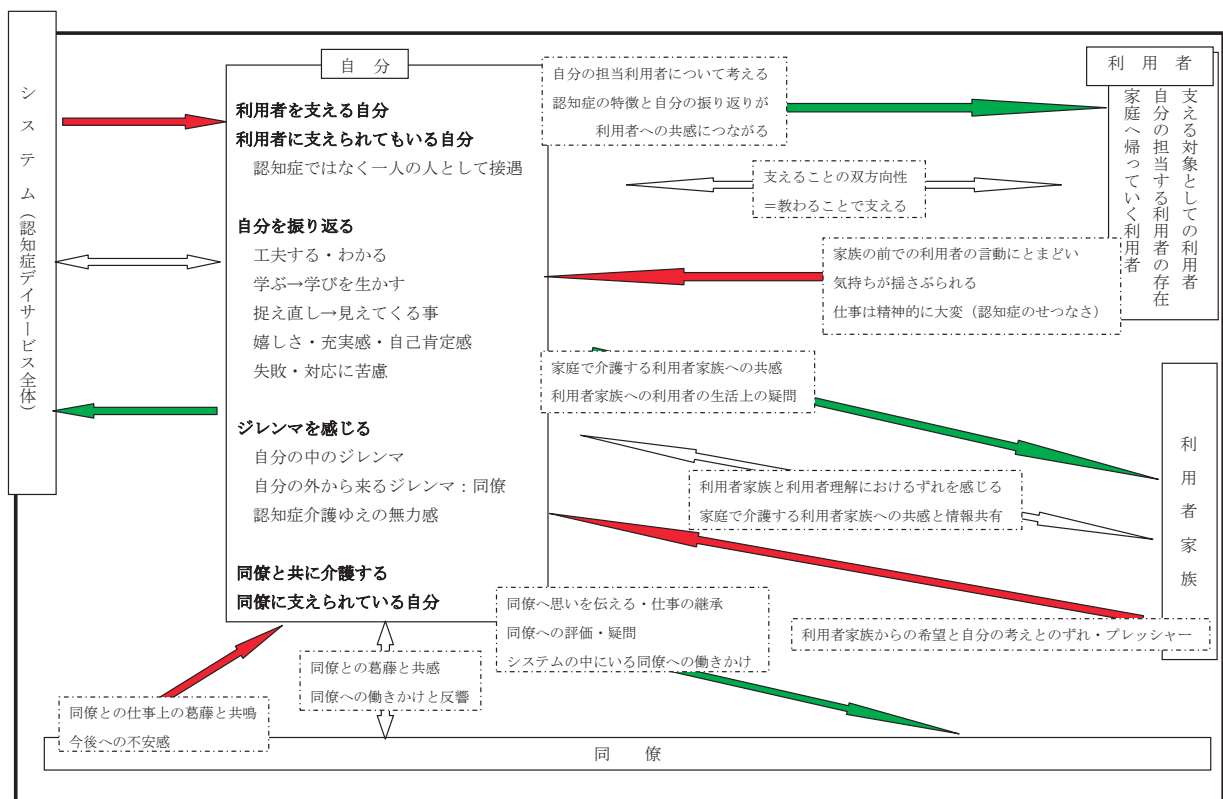


図1 デイサービス職員が体験していること 構造モデル図

(結果の記述例)：サブカテゴリーは「」で、概念は下線で表した。

サブカテゴリー「利用者を支える」では、「利用者認知障害のために感じていると想像される利用者の不安の意味を受け止めて、利用者を不安にさせない方法や不安にさせない意義について意識する (C職員)、例えば「入浴を嫌いがちな特徴を持つ認知症の人に気持ちよく入浴してもらう工夫をすること (B職員)」、「仕事量は多いがそれは自分がかんばればよいことで利用者とは直接かかわって不安をなくすようにすることが大事 (C職員)」、「認知症の人ではなく一人の人として接する (F職員)」ことが語られた。また、認知症介護に必要なだと感じるが、実際の現場での問題として、「ひとりの利用者への働きかけに他の利用者が興味を示すことがなく、一人ひとり違う利用者にはぴったりの対応を心がけようとしたとき感じる1対1対応実現の難しさ (B職員)」が語られた。サブカテゴリー「利用者を支える」では、介護職員が、入浴など具体的な支援と、利用者の認知症の行動・心理障害をどのように理解するかを意識していると語られたが、支えることは精神的側面に重きが置かれていた。

## 【結果と考察】

これまで本研究においてどのようにデータが収集され、そのデータにどのような分析を加えたかという研究プロセスについて説明した。以下にこれらの研究プロセスが導き出した結果に言及しながら、本研究における探索的研究方法の目的「プロセスの可視化とその結果としての論文読者に対する反証可能性の保証」が研究において達成されたかどうか、考察を加えていきたい。

考察は、前述の能智論文<sup>6)</sup>で質的研究の評価基準について整理されている以下の観点に沿って進めていく。すなわち、1) 質の高いデータが収集・利用されているか、2) データの処理と命題の導出は適切か、3) 結果を利用できるか である。

結果としてフィールドを熟知し、研究対象者との良好な関係を築けたこと、厚い記述は得られたと考えられること、データの処理と命題の導出はほぼ適切であったことなどが確認され、採用した研究方法は細部において課題を残したものの概ね「プロセスの可視化とその結果として論文読者への反証可能性を保証」していると判断された。以下に詳細を記述する。

### I 質の高いデータが収集・利用されているか

質の高い研究を行うには、研究対象から直接得た「質の高い」データを分析に使用することが求められる。

能智はこれを量的研究における「信頼性」とゆるやかに対応するとし、依拠可能性という言葉を用いて、収集されたデータが、研究者の想像やでっち上げではなく、そこから新たな仮説やモデルを見出すことができるほどの豊かさをもったものと規定しており、この基準が満たされるための2つの条件を挙げている。この2つの条件にそって本研究を検討した。

#### I-1 フィールドとの関係

能智は、質の高いデータの前提条件として研究者が研究フィールドを熟知し、研究対象者と良好な関係(ラポール)を構築しつつデータを収集することをあげており、そのためには参与観察が欠かせないと述べている。デイサービスの勤務形態は、遅番、早番、夜勤などがなく、職員は交代で休暇をとるので、筆者がボランティアを兼ねた見学者として参与観察を行ったことは、職員と同じように出勤し職員と共に働くということが可能であり、本研究の調査は短期間であったが職員と濃密なかかわりを持つことができた。職員に記述してもらった感想の中で、職員が望む手助けの項には、利用者帰宅後の掃除や雑務、利用者に寄り添って共に過ごしてくれる、利用者見守りの目と手、などが上げられている。これらの内容は筆者が参与観察時にまきに行った行為であったことを考えると、参与観察は職員の意に沿う形で進められたと考えられる。また、参与観察の前にこのデイサービスを含む社会福祉法人の理事と看護師長に事前に話を聴いて、全体像をつかめていたことはフィールド理解を大いに助け、参与観察期間の短さを補ったといえよう。

#### I-2 厚い記述

収集されたデータが新たな仮説生成やモデル構築を支えるためには、厚い記述が求められる。厚い記述について能智は、記述されている事象を他のさまざまな事象と関係付けながらデータを蓄積していくことが求められると述べている。そこで以下の3点について具体例を用いて考察する。まず調査方法としてインタビューを用いる目的であった「研究課題にそった質問によってデータの厚みを増す」ことができたかどうか、次に非構造化インタビューをアクティブインタビューと捉えて採用した場合、やまだが「インタビュー行為はそれ自体が貴重なナラティブ研究の対象であると同時に常に省察的に研究されるべき対象でもある」<sup>9)</sup>と述べている点に呼応して、ラダリングという手法を用いたことで、語られる事象を研究者の恣意は極力排除するが、研究の目的としている「語られることからの関係性を明らかに」しつつ聴けたかどうか



か、最後に PAC 分析の面接法を用いたことでインタビューイがインタビューアから規制されることなく自由に、インタビューイ自身の内面から引き出された項目に沿って語る事ができたか、である。

まず、インタビュー法を用いたこととラダリングを採用したことについて、データから「家族が気になる」という気持ちが語られた例を示し考察を行う。以下の例は内容をまとめたもので「」は職員、() は筆者の発言。データの敬語丁寧語は省略した。「ご家族は気になる」(具体的にどのような点が)「デイサービスから帰宅して利用者の様子が良くなったと家族が感じるかどうか気になる。」(それはどうして)「デイサービスは24時間のうちの6時間でしかない。残りの18時間を過ごす家庭で利用者と家族は影響しあっていて、家族がいい顔ができれば、利用者もいい顔になっていくから。」この例が示すように、一つの発話「家族が気になる」について、インタビューによって、「その発話の意味はどのような構造なのか」という研究課題に沿って質問を発することができ、ラダリングの手法によりこちらから構造についての手がかりを示すことなくインタビューイ自身の発話から、『家族が利用者にとっていい顔ができる→利用者がいい顔になる』と思うので、家族がいい顔をしているか気になる = 「家

族が気になる」という構造を引き出すことができている。この例からもわかるように、研究方法として非構造化インタビューを用い、その中にラダリングを組み込むことで、研究目的の「関係性」に沿った厚い記述をインタビューイ自身の語りから引き出すことができたといえよう。

次に、PAC 分析の面接法を用いた点について、以下に PAC 分析面接の事前作業によって得られたデンドログラムと実際に語られた内容から抽出された概念を表にして対比し、考察を試みる(表5・6 表中の下線部は抽出された概念を表す)。

表5は、デンドログラムに沿って語られた例である。利用者とはかかわっているにもかかわらず介護の具体的な事柄について語っておらず、このことについてこの職員は、インタビュー後「(管理者という)役割を意識しすぎて、介護のことを話してませんね」と感想を述べ、デンドログラムが語りのガイドになっていると共に介護については他にも意識することはあることをうかがわせた。事実、印象深いできごとについて語るインタビュー後半において、介護についてさまざまなことを語ってくれた。

表6は、面接前の作業において、二つの項目しか挙げなかったためデンドログラムが描けなかった例であ

表5 デンドログラムと概念を含む語りの内容 (例1)

デンドログラム	概念を含む語りの内容
	<p>心の中にはまず責任というのがあり、<u>責任</u>はいつも底に流れているような感じであり、その<u>責任</u>は具体的には<u>デイサービスをまとめていく</u>ということだ。まとめるという<u>責任</u>を負うことは、<u>発信</u>していき、周りの意見を<u>聞き・話して</u>いくことで<u>関係を整える環境づくり</u>をしながら、<u>様々なものをボトムアップ</u>していく、<u>流れ(循環)</u>のようなものだ。</p>

表6 デンドログラムと概念を含む語りの内容 (例2)

デンドログラム	概念を含む語りの内容
<p>利用者が不安にならない言葉かけを考える。 笑顔で話しかける。</p>	<p>利用者は認知障害による<u>不安感</u>を持つ存在として理解している。自分が理解するように心がけていることは、利用者はどのような不安を抱くのか、またなぜ不安を抱くのかを具体的に理解することであり、そこから<u>不安にさせないための方法や工夫</u>につないでいき、また<u>不安にさせないこと</u>にどのような意義があるかを考えている。仕事は大変だが、それは職員の側の都合であって、いつも利用者の不安を念頭において、<u>仕事内容を吟味</u>してすごしている。</p>

る。表6からは事前作業のときに取り上げた文が2項目であっても、語りの内容は豊かに広がっていることがわかる。

インタビューの際、インタビューイは全員「どんなことを答えていたか忘れてしまった」といいながらデンドログラムを見て、自身の結果に納得しながら、時に現在と少し変化があることなども説明してくれながら語ってくれたことを考えると、これらの項目は、インタビューイが、インタビュー以前の参与観察が行われた頃の自身の考えを思い出して語ってくれるガイドになっていたことがわかる。本研究におけるインタビューは、参与観察で調査者とインタビューイの関係ができたところで行われたことにより、デンドログラムの結果にあまりこだわらず、インタビューイの持つ語りの能力が発揮される形で行われたと考えられた。

## II データの処理と命題の導出は適切か

能智は、量的研究でいうところの「内的妥当性」に比して、質的研究のそれを「レポートに記述されているカテゴリーやカテゴリー間の関係がその背景にあるデータを確かに（credible）反映しているかどうか」にかかっていると述べている。データをもとにして何らかの命題を導く際に見られる誤りは、量的であろうと質的であろうと、実際には関係や差がないのにとみなすこと、と関係や差があるのにとみなすことの二つの典型がみられるといい、これらの誤りを回避するには、仮説を別のデータで示すこと、別の視点から見直すことを勧めている。

まず、データを分析する際に参与観察時のメモをもとに分析した例において、「仮説を別のデータで示す」方法で、データ処理と命題の導出について考察を加える。一人の職員からあるご利用者への「嫌われちゃった」発言が多い。という観察メモに関する概念とそのバリエーションの具体例である。観察において、この利用者の「あんた嫌いだよ」という発話は、どの職員に対しても日常的に視察されたが、ある日当該職員に「嫌われちゃった」という発話が多く出現したことから、その背景にある職員の感情に着目し、観察メモにも残しておいた事例であった。以下にこのエピソードが語られたデータが入った職員別分析ワークシートの一部を示す。

概念名	利用者への戸惑い
定義	利用者の言動に対する戸惑い
バリエーション	①（迎えに行っても「あんた悪い人」と言われた事に対して）それほどじゃじゃないんですけどもね、確かにその久しぶりに行って、あのう、まそれは別に、あのう言葉だけだったりとか、ま、Hさんの真実がどこにあるかってのは、計り知れないところではあるんですけども、 ② やっぱりこう、そういう風にいわれると、ええ？っていう、（笑）正直な所ね、うん、しかもご主人の前で言われたから。【利用者家族と重複】 （以下省略）

観察において気になっていたことに関するエピソードだったので、バリエーション①の発話のあとに、さらに「それはどうして？」と詳しい気持ちを聴いていき、バリエーション②が得られた。そこで、バリエーション①は「利用者への戸惑い」概念に入れ、バリエーション②は「利用者への戸惑い」と「利用者家族」双方の概念に入れた。

この例では、参与観察の際に筆者が着目した職員の感情と行動の関連について、この職員の感情がどのように引き起され、その感情がどのような行動となってあらわれるのかをインタビューデータから考察できた例であるといえよう。このことは、能智がデータ処理と命題導出における誤りを回避する方法として勧めるもののうち「仮説を別のデータで示すこと」の好例であるといえる。

しかし、すべての観察データをインタビューデータから検証できていないことを考えると、観察データを整理してインタビューに臨みインタビューイの発話データから検証すれば、観察データをより有効に使うことができたと考えられる。

次に「別の視点から見直す」方法で、データ処理と命題の導出について考察する。能智は、別の視点とは、一方で情報源に関する別データ、つまりインタビューデータと観察データ、質的研究データと量的研究データなどをあげており、それとは別に、他者の視点を導入して確かめる「メンバーチェック」を紹介している。本研究においては、インタビューデータと観察データという複数のデータはあるものの、質的検討と量的検討、メンバーチェックは行われておらず、今後の課題であると考えられる。

## III 結果を利用できるか

量的研究における研究の質として信頼性や内的妥当性と並んで重要視されるのは、「外的妥当性」である。これはデータから母集団全体に当てはまるような平均



像を描き出せたかどうか、つまり一般化可能性のことである。質的研究において外的妥当性の代わりになるものとして能智があげているのが、転用可能性であって、それは特定のデータから得られた命題をそのデータ以外の何事かの理解や洞察に利用できるかということである。能智は転用可能性を、個人的な了解感を基盤にした「自分と自分の周囲への転用」と、知覚される類似性を根拠にしてさまざまな推論や問題解決を行うアナロジーと呼ばれる認知機能を基盤にした「他の事例への転用」をあげており、どちらの転用も、厚い記述によって達成されると述べている。転用を可能にする厚い記述は、本項のⅠによって確かめられたと考える。「自分と自分の周囲への転用」については、本項Ⅱで述べたように、メンバーチェックができておらず、自身の中での了解感を得られたが、周囲の了解感を得られたとはいえない。また、「他の事例への転用」については、データをもとに職員が体験していることを構造として図に表わすことができ（図1）、図に表わされた構造をもとに、他の事例におけるデータを分析し比較できると考えられ、可能であると考えられた。

## 【今後の課題】

結果と考察と同様、能智の質的研究の評価基準に沿って本稿で検討した研究方法の限界と今後の課題について報告する。検討を加えた研究方法は、おおむね研究目的に沿った内容であったと考えられるのは、結果と考察で述べたとおりであるが、PAC分析の面接法を採用すること、サンプリングの問題、参与観察記録の扱い、などにおいて今後課題を残した。以下に詳細を記述する。

### Ⅰ データ収集

結果と考察で述べたように、データ収集は概ね厚い記述を得ることができ、研究目的に沿ったと考えられる。しかし、本稿において検討したインタビューは、参与観察で調査者とインタビューイの関係ができたところで行われたことにより、PAC分析インタビューの事前作業で得られた情報にあまりこだわらず、インタビューイの持つ語りの能力が発揮される形で行われたことは結果と考察でも述べたとおりである。今後インタビューイとの事前コミュニケーションが難しい場合や、対象者に多くの調査時間を割いてもらえない場合などは、PAC分析インタビューに代わる手法でのインタビューが必要となろう。そのひとつの指針となるのは、インタビューの前にメモを作っておいて貰う、という方法ではないか。インタビューイ自身の

内側から出たデータを得るためには、調査者が設定したものではない、インタビューイ自身の内部から出たきっかけを必要とするであろう。そのきっかけがインタビュー前にインタビューイにお願いして記述してもらったものであり、それに沿って話を聴く方法が有効であると考えられる。

さらに、サンプリングについて考えると、大規模な施設での調査では、今回の調査のように職員全員を調査対象とすることが不可能である場合も想定されるので、そういった点からも、理論的サンプリングの工夫も必要となってくると考えられる。例えば、性別、年齢、経験年数の違いや介護教育歴・取得資格、現在の待遇や常勤・非常勤、管理職かどうかも含めた介護経験などを考慮する、大規模な事業所内でいくつかのグループに分かれた中の1グループを対象にする、などが理論的サンプリングの指標となるであろう。

### Ⅱ データ処理と命題導出

インタビューデータと参与観察データを比べる作業によって、仮説を別のデータで示すことは可能になった。参与観察は観察データという側面、参与観察から得られた情報をインタビューに活かせるという利用方法の側面、双方において、語られた内容をより具体的に理解し、関係性を見ていく際のガイドとなりうる点で有用であったといえる。参与観察は重要な役割を持つことが示唆されたが、参与観察結果を整理しておき、インタビューに活かすことが充分に行われなかった点、論文の中で参与観察結果を結果や考察に利用する際、参与観察結果についても分析ワークシートを用いた整理などを行ってプロセスを明示する方法が必要と考えられた点などが、今後の課題として残された。

また、分析過程におけるメンバーチェックができておらず、それをどのような形で行うかも課題である。

### Ⅲ 結果の利用

本研究では触れていないが、介護職員の待遇や介護施設経営といった介護全体に対しての考察は介護職員に大きな影響を与えていると思われる。したがってこれらの現状に対する考察を付与することによって、転用可能性を広げていくのではないかと考えられる。

また、研究方法Ⅱ分析で予測したように、職員にはそれぞれ経験や職場での役割、性質などに裏打ちされた個性とも呼ぶべき考えや動きの存在が明らかになった。今後は「典型」の人の特徴を詳細に描き出すことで、別の事例を見るための目安として利用できよう。

本研究は、1事業所、6例のインタビューから、介護者の認知症の理解を描き出そうと試みたものであ

る。この研究において1事業所の構造を描くことはできたが、1事業所から抽出された概念には限界があり、今後、介護施設の設定を変える、介護職員だけでなく、利用者、利用者家族の視点を含める、など多角的に検討していく必要があると考える。

#### 【謝辞】

本稿をまとめるに当たり、調査協力を頂きました関係各位、ご指導を頂きました先生方に感謝申し上げます。

#### 【引用文献】

- 1) 平成18年厚生労働省・介護施設などのあり方委員会：2025年の高齢者像  
(<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2006/09/dl/s0927-8e.pdf>, 2009. 7. 10) (2008)
- 2) 鎌田ケイ子：痴呆ケアの本質。老人ケア研究, 17,1-10 全国高齢者ケア協会 (2002)
- 3) 小澤勲：痴呆を生きるということ。岩波新書 847, 第1章, 岩波書店 (2005)
- 4) 平成19年厚生労働省・介護保険制度の被保険者・受給者範囲に関する有識者会議：介護保険制度の被保険者・受給者範囲に関する中間報告  
(<http://www.mhlw.go.jp/shingi/2007/05/s0521-12.html>, 2009. 7. 10) (2007)
- 5) 西條剛央：質的研究論文執筆の一般技法—関心相関的構成法。質的心理学研究第4号 186 - 200 質的心理学会 (2005)
- 6) 能智正博：質的研究の質と評価基準について。東京女子大学心理学紀要創刊号 (2005)
- 7) 川野健治：心理学と方法。心理学方法論 渡邊芳之編 朝倉心理学講座1 第1章 朝倉書店 (2007)
- 8) 堀恭子・安藤孝敏・吉川玲子：介護職から見た認知症高齢者の帰宅願望；質的データによる検討。横浜国立大学教育相談・支援総合センター研究論集 (7)27 ~ 53 横浜国立大学
- 9) やまだようこ：非構造化インタビューにおける問う技法；質問と語り直しプロセスのマイクロアナリシス。質的心理学研究第5号 194 - 216 質的心理学会 (2006)
- 10) 内藤哲雄：PAC分析実施法入門。ナカニシヤ出版 (2004)
- 11) マリアン・コーリィー・ジェラルド・コーリィー：心理援助の専門職になるために；下山晴彦監訳。第4章, 金剛出版 (2005)
- 12) 川野健治：発達研究における変化；高齢者介護研究を通して。心理学方法論 渡邊芳之編 朝倉心理学講座1 第5章 朝倉書店 (2007)
- 13) 能智正博・難波淳子・川野健治：質的データの分析技法；働きながら識る、関わりながら考える；心理学における質的研究の実践。伊藤哲司・能智正博・田中共子編 第9章 ナカニシヤ出版 (2005)